

「時」を重ねて創る共生社会

岩手県立岩谷堂高等学校 3年 及川 きらら

人は誰もが毎日平等に「時」を重ねている。けれど、その時間の重みや意味は、経験や出会いによって大きく変わる。私は、「時」はただ過ぎるものではなく、人の価値観を育て、未来につなげるものだと考える。そうした中で、津久井やまゆり園の事件から十年を迎えた今、私たちは障がい者とうまく向き合うべきだろうか。

私は福祉の現場で働く両親のもと、幼い頃から障がい者と関わる環境で育った。その時間が福祉を身近なものとし、障がい者福祉に携わりたいという目標が自然と生まれた。しかし、障がい者施設でボランティアを行った際、私は「支援する側、される側」という関係性にどこか違和感を抱いていた。この経験から、支援以外の関わり方を探す中で、福祉を起点に新たな文化を創り出している企業「ヘラルボニー」を知った。「福祉＝支援」という見方だけではなく、障がい者の魅力や才能を社会に届けるという新しい福祉のあり方に出会い、自然に関わり、障がい者を知る時間を重ねることが理解につながると気づいた。事件から十年経った今も障がい者への偏見が多く存在する。そこで周囲の意識を調べるため、卒業研究で全校生徒と先生方を対象にアンケートを実施した。結果、関わった経験がない人は「できないことが多い」「怖い」などマイナスのイメージを持つ傾向にあったが、関わったことでプラスのイメージが変わった人もいた。さらに、障がい者施設の利用者や職員からは、「関わることで障がいのことを知ってほしい」という回答が多くあった。このことから、十年という時が流れても偏見が存在するのは、障がい者と関わる機会が少ないことが一つの理由だと考えた。ただ時間が経過するだけでは、人の価値観や障がい者への見方が変わるとは限らない。人との関わりや経験を重ねることで、過ぎていく時間が価値観を育てる「時」になるのではないだろうか。だからこそ実際に関わり、知る時間を作る必要がある。

そこで私は、ボランティア先の施設とペットボトルキャップを用いたアップサイクルのコラボ企画を計画している。利用者に仕事を教わり、共同で制作することで、「支援」という枠組みを超えた自然な交流が生まれると考えたからだ。こうした時間を積み重ねることが障がい者の魅力や才能に気づくきっかけになると信じている。

これから先、私たちが障がい者と向き合っていくために必要なのは、支援という形ではない関わり方で、相手の魅力や才能を知る「時」を重ねていくことだ。ただ時間が過ぎるのを待つのではなく、時間をかけて知っていくという一人ひとりの積み重ねが、偏った見方を変え、自然に関わり合える社会につながると考える。私は、障がい者を支援の対象としてだけで捉えず、その人らしさを周りに伝えながら、誰もが自分らしく輝ける未来へ向かって歩いていきたい。